グローバル化のトリセツ
何を？どう？伝える？
第１回

留学相談五つのポイント

グローバル人材の育成が叫ばれる。しかし、高校の教育現場に留学や海外大学進学に関する専門家は不在だ。本連載はその「トリセツ」（取扱説明書）となるべく、様々な事柄を取り上げる。本連載は世界7カ国への留学手配を行うヨーク国際留学センターが担当し、同社の藤延芳子氏が留学・進学について、同じく同社の澤田晃宏氏が語学教育ニュースに関する解説を取り上げる交代連載だ。読者からの質問も受け付けている。

「留学したい」と生徒に言われて

「先生、僕、アメリカに留学したいんですけど…」と突然生徒に相談されたら、どう対応しますか？　先生方の反応はいくつかのタイプに分かれるようです。

タイプ１「留学？　おまえ英語できないじゃないか。それにアメリカの大学出たって日本で就職どうするんだ？　おまえだったら、早慶は厳しくてもＭＡＲＣＨは合格圏内だぞ」とはなから留学を否定するタイプ。

タイプ２「留学したいって言ったって、海外は危険だし…皆が皆成功して帰ってくるわけではないだろうし…大学に入ってから考えてもいいんじゃないかな」と先延ばしにさせるタイプ。

タイプ３「留学したいのか。ふ～ん、どうしてそう思うようになったんだい？　へ～、なかなかチャレンジ精神持ってるんだね。入試とかどうなってるんだろうね、調べてみたかい？」とまず生徒の気持ちを理解して、励まそうとするタイプ。

多くの先生はタイプ３であってほしいと思います。タイプ１やタイプ２のような反応をしてしまう理由の一つは先生自身が留学についてあまり知らないのでとりあえず反対、とりあえず先送り、ということがあるようです。でも、先生が留学のすべての知識を持っていなければならないということはないのです。今は各公的機関が提供している留学情報をインターネットで簡単に入手できますし、留学カウンセラー資格を持つ留学カウンセラーをおいている留学サポート会社・機関も増えました。先生はそういう情報や人の力を借りながら、生徒をコーチングしていただきたいと思います。

大切なのは意思と自覚

では、「留学したい」と相談されたらどう対応したらいいのでしょうか。私たち、留学カウンセラーが基本としているポイントから次の五つを紹介しましょう。

㈱ヨーク国際留学センター所長
藤延芳子
fujinobe-yos@york-global.jp
日本の留学カウンセラーの草分け。30年以上の留学カウンセリングの実績を持つ。キャリアカウンセラー資格を有し、留学後も含めたカウンセリングは保護者からも厚い信頼を得ている。

（1）「留学したい」と思ったきっかけや目的をじっくり聞いてあげる。

留学したいからにはそう思うようになったきっかけや目的があるはずです。ある生徒はコンピュータが大好きでスティーブ・ジョブズがあこがれの人、将来はシリコンバレーで働きたいからアメリカの大学に行きたくなったとか。コーチングでいう「傾聴・質問」をしながらきっかけや目的を引き出していくと、生徒が真面目に留学を考えているのか、単に一過性の憧れなのかが見えてきます。

（2）前向きなそのチャレンジ精神を大いに褒めてあげる。

今どきの若者は内向きだとか覇気がないとか言われていますが、アメリカに留学したいと先生に言ってくるなんて素晴らしいと思います。その前向きなチャレンジ精神を大いに褒めてあげてください。コーチングの「承認」です。ある先生がアメリカ留学を相談された生徒に「前向きな姿勢が素晴らしい」と褒めたら翌日から毎日英単語を覚えるようになって英語の成績がぐんと上がった、と話されていたことがありました。夢があってそれに向けて勉強することは苦ではなくなります。

（3）自分で調べることを勧める。

留学したいとなったら次に留学情報を集めなければなりません。入試の仕組み、ＴＯＥＦＬの受験方法など、その方法はいろいろあります。①その国の大使館・領事館や公的機関のホームページに留学情報が掲載されています。②独立行政法人学生支援機構のホームページにも海外留学のページがあります。③民間の留学サポート会社・機関は直接相談に乗ってくれます。

先生は調べ方をアドバイスするだけで調べることは生徒本人にさせてください。生徒は自分で行動することでぼんやりしていた留学への憧れが明確な意思へと変わっていきます。

（4）保護者の賛成の有無を確認する。

どんなに崇高な目標を持って留学を希望していても、保護者の賛成と援助がなければ留学はできません。授業料や生活費を出すのは保護者です。「親が留学に反対している」という相談を受けることもあります。反対の理由は子どもの留学の目的が曖昧、現地の治安が心配、経済的に無理、などいろいろです。保護者と一緒に考えることが大事です。

（5）留学することを決めたのは自分自身だという自覚を持たせる。

最後に、留学を決断したのは自分であること、親でもない、先生に勧められたからでもない、自分が希望して留学するのだ、という自覚を持つことが大切です。中には生徒本人よりも保護者のほうが留学させたがっているというケースもあります。でも、大切なのは本人の意思と自覚。これがあれば、長い留学生活の中で必ずぶち当たる壁を乗り越えて頑張れるのです。

人は無限の可能性を持つ

私は留学カウンセラーという仕事をしてもう30年以上になります。この仕事が楽しいのは人の成長を見ることができるからです。そしてそこに少しだけ自分が関わった喜びを持てるからです。その点、教師という仕事に似ているかもしれません。高校の成績は落第すれすれだったＮ君。アメリカに留学し、最終的にはテキサス大学でＭＢＡを取得して今は１００冊以上の著書もある国際経営コンサルタントとして活躍しています。高校１年生の夏休みに秋田から東京まで一人で留学相談にやってきたＣさん。入学には高校の成績が重要だといったら３年生の夏休みにオール５の成績表を持ってやってきました。留学相談にやってきた人たちの目的も成績も英語力もさまざまですが、彼らの５年後、10年後を追ってみると、『人は無限の可能性を持つ』ということをつくづく感じます。